

序章 問題提起	11
第一章 士林派	33
第一節 朝鮮王朝前期の国家収取体系とその変容	36
I 地租	36
II 貢納・進上	37
III 軍役	39
第二節 士林派と勲旧派	42
I 私と公	42
II 国家収取体系変容の契機	44
第三節 結論	48
第二章 理気論と四端七情論争	55
第一節 朱子の四端七情論	56
第二節 朝鮮での四端七情論争の経緯	63
第三節 主理主義の四端七情論	66
第四節 主気主義の四端七情論	70
第五節 四端七情論争の発生原因	76
第六節 結論	80
第三章 郷村・地域編成論	89
第一節 李栗谷	91
I はじめに	91
II 清州牧での西原郷約の失敗	93
III 海州牧での郷約、社倉類の作成と成功	95
一 三つの郷約・社倉類	95
二 郷村構成員	102
三 郷村編成論	108
四 郷所論	120
五 文人素養	122
IV 結びに代えて	124
第二節 李退溪	126
I はじめに	126
II 礼安郷立約条	127

III	温溪洞規	135
IV	上下洞約・郷約の成立	143
V	官と地域	147
第三節	結論	152
第四章	権力編成論	175
第一節	李栗谷	177
I	はじめに	177
II	権力主体論	180
一	李栗谷	180
二	朱子との比較	183
III	集権化の契機	189
一	朱子	189
二	李栗谷	190
第二節	李退溪	193
I	はじめに	193
II	権力主体Ⅱ官僚機構	195
一	士禍の時代	195
二	李退溪	196
三	朱子と李栗谷	202
III	李退溪と李栗谷における集権化の契機Ⅱ行政課題	205
一	南北の外敵	205
二	軍制改革	206
三	士禍への態度	208
IV	冊封体制	211
第三節	結論	214
第五章	ナシヨナリズム	223
第一節	はじめに	223
第二節	主理派と主気派	229
第三節	李退溪の小中華主義	232
第四節	日本近世思想史との比較	237
第五節	統一国家形成と固有信仰・建国神話	238
第六節	李栗谷と潜在的朝鮮主義Ⅱナシヨナリズム	246

第七節 朝鮮時代後期における展開……………251

終章 近現代史への展望……………265

補論一 現代韓国における儒者・儒教の記憶と機能……………277

——朴正熙時代を中心として

第一節 紙幣と儒者……………279

第二節 韓国における儒教評価の歴史……………281

第三節 朴正熙の儒教・儒者論と国家的記憶……………286

I 朴正熙への毀誉褒貶……………286

II 初期における現状認識と儒教批判……………287

III 儒教批判の後退……………292

一 国家への忠誠と家族共同体・個人……………292

二 宗族……………300

三 地域主義……………302

IV 儒者の記憶と韓国ナショナリズム……………303

第四節 結びに代えて……………310

補論二 韓国における住宅文化の一断面……………323

——日韓の賃貸借住居の比較を中心として

第一節 はじめに……………323

第二節 日本の賃貸借住宅……………324

第三節 韓国の賃貸住宅概況……………325

I 傳貫(チヨンセ)……………325

II 月貫(ウォルセ)……………328

III オピステル……………330

第四節 傳貫定着の歴史的考察……………332

I 従来の説明……………332

II 韓国人の人間関係……………333

第五節 結びに代えて——住宅文化と韓国社会……………337

あとがき……………345

索引……………